

昭和二十一年四月廿九日、離島レムパンで天皇誕生日が祝われた。シンガポール渉外部において、声なき万才を唱えて新年を迎えたと同じ感懐であった。この日「レムパン島開拓史」の第一頁が書きはじめられた。

私の入島一ヶ月目である。先人の苦斗の跡を見、かつ聞いて、八万将兵の精魂が身内に躍動するを覚えた。この苦斗の記録をまとめることこそ、後から島に來た者の義務であると痛感された。時あたかも内地帰還の船が続々島に來着して、人々は足取りも軽く港に向かった。班員の努力はかくしてこの歴史編さん集中された。

根来、宮下、田中は資料の集取に奔走した。宮下は同時に、「農耕」「創意

工夫」を、田中は「衛生」「文化」の一部をそれぞれ執筆した。日比野は集められた資料およびみづから島内視察のさいの記録を参照して、その他の全部を執筆した。原稿の浄書は伊藤が専らこれにあたり、後で田中、宮下が援助した。

こうして全員の総力を極度に綜合發揮して、五月九日脱稿したのである。時日の短かかったことは、何としても本史の不完全さを來した大きな原因であった。

筆者もまた、

イ、地域的には南レムパンを主とし、北レムパン及びガラン島の詳細にわた

り得なかつたこと

ロ、時間的経過をあきらかにし得なかつたこと

ハ、補給業務分野について触れられなかつたこと

ニ、八万の人々の生活秩序形成としての、いわゆる純師系統の問題を省略したこと

ホ、諸統計数をさらに多く利用し得なかったこと等の不満を残したまま、まとめたのは残念であった。

執筆の主眼は、われわれ八万の同胞が、いかに苦闘し、いかに建設し、いかに歓喜したかにおいた。そのためには出来得る限りの人々についてその記憶や印象の再現をわずらわし、これが真実の表現に努力した積りである。書き落したこと、書き足りなかったことはまだまだあった。しかし書いたものには何の誇張も何のフィクションもない、真実そのものである。無論この貧しい文章が、あの苦難の全部をいつくしているなどとは、どうしてもいいきれない。せめてその一端でもほうふつされるならば、吾々の目的は達せられるのである。ただ執筆に際しては全く私の史観をもって終始していること、したがって文中一切の責は私にあることを明きらかにしたい。

隊員のほとんど全部は、その所属している本隊の帰還とはかかわりなく、こ

の仕事に熱中し、帰還がおくれた。その他軍司令部にあって、各種の資料を貸与された人々にも深甚の謝意を表さなければならぬ。

文中一切敬語は使わなかった。

班員は私の外、根来智蔵、田中正雄、伊藤完夫、宮下俊彦、金井保の諸氏である。

昭和二十一年五月九日

於レムバン島 日比野清次

早瀬水道にのぞんだ丘の上
一ところ立木の切りひらかれたあたり
白い杭が一本立っている
あれは、はげしい苦斗の後
病を得て亡くなった
一作某隊員の墓標である。

いつかひとりの兵隊が
その前にひざまづいて
野牡丹の花を供えているのを見た
いま戦友たち選ってしまい
丘すその無人の宿舎は
夕暮の薄闇に沈んでいる

やがて丘の上にも
夕べの色が漂い
はなだ色の空に
十字の星が光りはじめる時
ひとりでにわたしは考えこんでくる
まもなく島を去って
みんながみんな選るというのに
あの丘にさびしくいつまでも
還らないものが一人居る

それは測り知れない宇宙の意志だろうか
自分のからだのどこか疼きいたむような
身近なかなしみといとおしさを感ずる

丘の上の白い杭
花の供わらない白い墓標

終戦のなげき

赤松要

八紘の宇^うみるみるに崩れゆく
めまいにたえて詔^{みこと}きはべる

おちこちに嗚咽^{おとげ}きこえて室内に
林のごとくひと立ちつくす

老將軍涙ふきつつようやく
言葉いでけり承諾必謹

わが書きし機密の文を燃くべしと
胸いたみつつ紙をめくれり

この想いいつか馬来の民族に
燃えあがるべし火焰樹のごと

序文 大仏次郎
 序詩 真下峻平
 短歌 赤松 要

第一章 レムパン島前史

レムパン島というところ……………七
 移動開始……………三七
 第二章 レムパン島開拓……………三三

苦 斗……………四〇

第一梯団入島……………四〇
 生きんがために……………四二
 建設……………四六

第三章 歓喜

内還船来る……………四七

一 穀……………四七
 農 耕……………四七
 漁 業……………四七
 製 塩……………四七
 畜 産……………四七
 建 築……………四七
 創意と工夫……………四七
 給 水……………四七
 衛 生……………四七
 嗜好 品……………四七
 文 化……………四七

内還順序の決定……………二六

内地帰還の人々を送る歌……………一五

あとがき……………一九

装釘 笠原 亘

レムパン島捕虜記

マライ軍八万のロビンソンクルーソー